

# 豪日女性の平等意識 (第1報)

—女子学生の意識調査から—

服部厚子・松本三枝子\*・大野光子\*\*・山田裕子\*\*\*

## Comparative Studies on the Women's Awareness of Equal Opportunities in Australia and Japan ( I )

—The Questionnaire for Female Students—

Atsuko HATTORI, Mieko MATSUMOTO, Mitsuko OHNO and Yuko YAMADA

### はじめに

太平洋をはさんで南と北に位置するオーストラリアと日本の交流は、近年ますます盛んになりつつある。しかし、経済的交流の活発さに比して、文化的交流については十分な情報交換が行なわれているとは言い難いのが現状である。殊に、国際婦人年以来の豪日両国における女性の地位をめぐる状況の変化については、資料の質的不足が、私達の相互理解を阻んでいると思われる。

「大学の一般教育における英語による『女性学』」の在り方を模索するべく結成された名古屋女性学研究会 (Nagoya Intercollegiate Women's Studies Research Group) は、その研究対象にオーストラリアの女性問題を選んだ。しかし、日本国内で入手可能なもののみでは資料が不十分であることから、最新資料の収集も含めた現地調査を企画、1987年8月に実施した。

本稿は、その折に収集した資料等を今後まとめて出版する第一段階としての、女子学生を対象とする意識調査の結果報告 (その1) である<sup>1)</sup>。

### 目 的

国際婦人年以来、世界的規模で女性の権利意識の高まりが見られ、男女平等は、意識の上でも、実践の上でも、少なくとも先進諸国では、加速度的に実現されつつあると言われている。この両性平等の理念が、女性達によってどのように理解されているかは、彼女達の受ける公的・私的教育の内容によって大きく影響される。本調査は、オーストラリアと日本の女子学生達が、自らの受けた教育をどのように認識評価しているかを比較検討することにより、両国における現時点での女子学生達をめぐる状況の相異を、明らかにすることを目的とする。

\* 名古屋大学医療技術短期大学部

\*\* 愛知淑徳大学英文学科

\*\*\* 同 AV センター

## 調査対象

調査対象としてオーストラリアでは New South Wales 州都シドニー, South Australia 州都アデレイドの女子大学生及び高校生 (以下「豪人学生」と表記する) 34名<sup>2)</sup>, 日本の対象群として愛知淑徳大学文学部国文学科1年生38名, 英文学科1年生65名とした。

## 調査方法

調査方法は, 学生用質問紙を用いて, オーストラリアでは1987年8月3日から19日の期間に, 訪問先のシドニー大学, アデレイド大学, レイネラ・イースト高校他で, 大学または個人を通じて小集団或いは個人に依頼し, 調査者の面前で回答を記入してもらった。愛知淑徳大学では, 同年9月9日及び11日に実施した。なお, Questionnaire を実施する意図については口頭でも説明し, また日本人学生には特に英文による質問自体にも少し解説を加えて正確な理解を期した。

## 調査内容

質問紙は, オーストラリア政府が「国連婦人の10年」以後強力に推進している女性の地位向上運動の重要な一環として本年実施した, National Agenda for Women の形式を参考として作成した。質問紙と回答者の年齢, 居住地域, 結婚歴, 学歴等を選択肢により答える部分〔A〕と, 記述式回答の部分〔B〕とに二分されている<sup>3)</sup>。次の3ページに学生用質問紙の全文及び調査結果を図にまとめたものを収録しておく。

## 結果

### 1) 豪日女子学生の意識調査の概観

豪日女子学生の意識調査の結果をパーセンテージで比較したものが, 図2である。この図を参考にしながら彼女達自身により書き込まれた意見をみていこう。

[問い1について]

家庭の中で両親により「伝統的な女性の役割」(‘the traditional female role’) を果たすように教えられたかという問いである。「いいえ」と答えた学生が, 豪日共に「はい」と答えた学生の数値を明らかに越えている。但し豪人学生の場合は「いいえ」が「はい」の2倍を越えているのに比べて, 日本人学生の場合は「いいえ」は「はい」の2倍には達していない。家庭教育における性の役割分担の意識は, 日本の方がオーストラリアよりもやや多いと見ることができる。ただここで見逃せないのは, 母親により女性の自立を教えられたと答えた日本人学生が少なからずいたことである。さらに彼女達は父親が「伝統的な女性の役割」の推進に熱心であったと付け加えてもいる。

[問い2について]

学校教育の現場における性別役割分担の意識に関する質問である。つまり, 「伝統的な女性の役割」に従うように教えられたのか, それとも男女平等の意識のもとに教育されてきたのかを問うている。豪人学生は76%が平等意識のもとで教育されたと答えているが, 日本人学生は52%に過ぎない。教育の現場での男女平等の意識の浸透は圧倒的にオーストラリアがまさっていることを, この数値は物語っている。

さらにここで注目すべきは, 答えを保留した日本人学生の24%である。彼女達によれば, 教

## Dear Women of Australia

Nagoya Intercollegiate Women's Studies Research Group is a small voluntary group consisting of women teachers, staff, and students of a number of universities in Nagoya, Japan.

We wish to gather information about our fellow friend in Australia and, by comparing with our date at home, we hope to learn from you and your society.

By filling out this short questionnaire, you will help us find out what is most important to women/girls like you. Some questions are answered by putting a tick in the box next to the answer you choose. For the other questions please write in your own words—we are interested in both!

### QUESTIONNAIRE

A. This section asks about you (no name is needed):

{ 1 } My age is

- under 25
- 25 - 44
- 44 - 64
- 65 and over

{ 3 }

- I was born in Australia
- I was born overseas:
  - English speaking background
  - Non-English speaking background

{ 2 } I am :

- never married
- currently married
- divorced
- widowed

{ 4 } I live in :

- A C T
- New South Wales
- South Australia
- Western Australia
- Queen's Land

{ 5 } I am :

- a full-time student
- a part-time student
- not doing any formal training or study at present.

{ 6 } I work :

- full-time at home
- part-time for pay
- full-time for pay
- in family business or farm
- at present, unemployed but seeking work

{ 7 } I have children :

- aged under 5  
(please give number)
- aged 5-15 years  
(please give number)
- aged 16 years and over  
(please give number)
- I have no children

Thank you! Now please answer the next part of our questionnaire.

## B. For Students

{ 1 } About your past, present, and future ...

- Do you think you have been expected through your childhood to learn to fulfill the traditional female role by your parents?

- Do you think you have been taught to conform to the traditional female role, or to be conscious and try to achieve equality at the schools you have attended?

- Do you think you will face more difficulty getting a job in the future than men because you are a woman?

{ 2 } Please tell us which of the following is most likely your future plan, and also tell us why.

- Do you plan for your future to continue to hold full-time paid jobs all your life?
- Do you plan for your future to work till you get married or have a child, and then become a full-time housewife all your life?
- Do you plan for your future to be a full-time housewife while your children are small and, when they grow up, start work full-time again?
- Do you plan for your future to live differently from the above 1, 2, 3, and if so, what are your plans?

{ 3 } Do you think Japanese women's status in their society is higher or lower than yours in your country? And why do you think so?

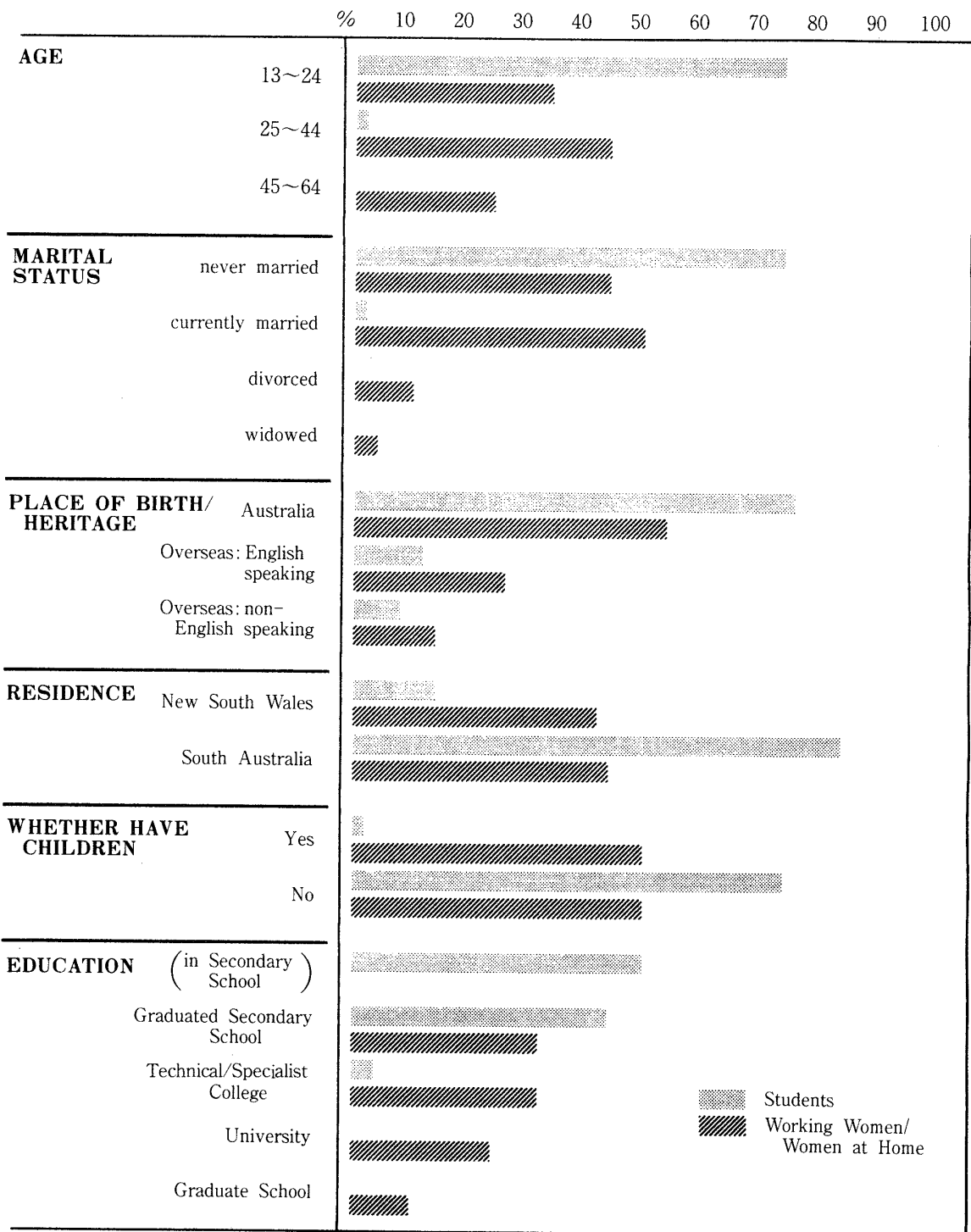
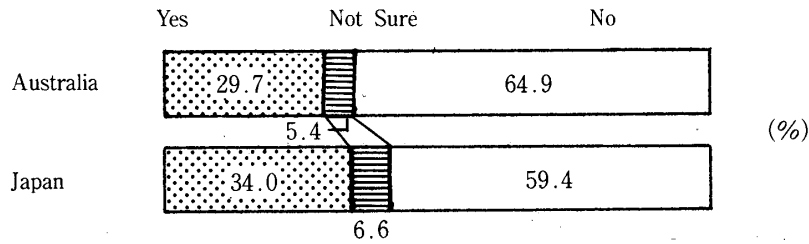


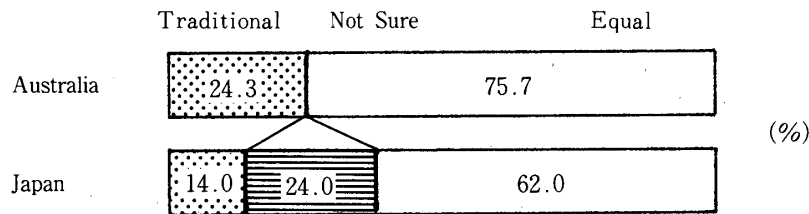
図1 アンケート調査回答者の特徴<sup>4)</sup>

[1]

- 1) Do you think you have been expected through your childhood to learn to fulfill the traditional female role by your parents ?



- 2) Do you think you have been taught to conform to the traditional female role, or to be conscious and try to achieve equality at the schools you have attended ?



- 3) Do you think you will face more difficulty getting a job in the future than men because you are a woman ?

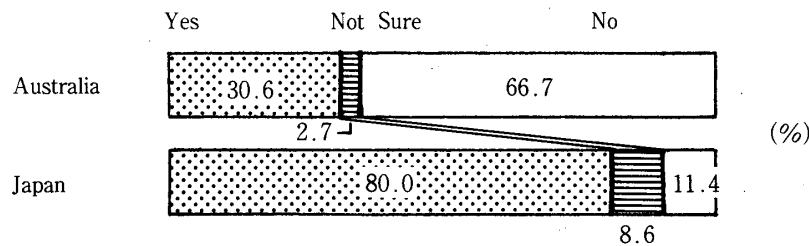


図2 女子学生の意識調査結果<sup>5)</sup>

育現場での平等意識は決して一様ではなく教員の個性と資質により左右されるのでどちらとも答えかねるということである。男性教員は伝統的考え方が根強く、女性教員は平等意識が比較的強いと説明し、担当教科によっても差異があると述べている。これは、日本の教育現場での平等意識が制度により裏付けられ、徹底されたものではなく、依然として個々の教員の考え方や経験の枠の中に留まっていることを示している。オーストラリアは、機会均等法制定後に AGENDA および FAIR GO 政策等により平等意識の浸透と徹底とを積極的に行政自らが先導している。そのようなオーストラリアの現状と日本の平等意識への認識不足と対応の遅さが、ここで明らかに背景にあるというべきであろう。

[問い3について]

学生達が社会に出て職業についてた場合に女性故に差別を受け不利な立場におかれると思うかとの質問である。問い1, 2が数値の多少はあるものの豪日学生の答えの傾向は同じであったのに比べ、この問い3では豪日学生の答えは対照的である。80%もの日本人学生が不利だと答

えているのに、豪人学生では67%が不利とは考えていない。つまり、日本人女子学生の圧倒的多数が就職および職場での性差別を予期しているが、豪人学生の大半はそのようなことはないと考えているのである。但し、日本人学生は均等法が施行されたので次第に状況が良くなるだろうとの希望を持っている。つまり将来に不安を持つ日本人学生にとって均等法によせる期待は非常に大きいといえる。

## 2) 豪日女子学生の意識調査にみられる具体的意見と考え方

[問い1について]

豪人学生の答えの中に一つの特徴がある。それは、「伝統的女性の役割」と高等教育との関係を述べたものである。例えば：

- ・ No, I was encouraged to go to college, and to study whatever I wanted.
- ・ Yes, they (parents) thought I should grow up, get married and have children. They were disappointed when I enrolled at university. ( ) 内は筆者

「はい」、「いいえ」のどちらの学生も大学進学との関係で性差別の問題について述べている。高等教育機関への進学が「伝統的女性の役割」の中に踏みとどまるか否かの踏み絵として認識されていることを、これらの意見は示している。

さらに、家庭教育といっても一様ではないとの意見もあった：

- ・ Only to a very limited extent. Not in career or education, but there was still an expectation of marriage/housework/children.

つまり、結婚、家事、子育て等は職業や教育とは異なり依然として「伝統的女性の役割」としてオーストラリアでも望まれているというものである。家庭内での男女平等が、公共の場でのそれらの達成とは必ずしも一致しないことをこの意見は語っている。

それでは、日本人学生の具体的意見についてみてみよう。豪人学生と異なり最も顕著なる特徴は、日本人学生のなかには「伝統的女性の役割」という概念を十分に理解できていないと思われる者がいたという点である。例えば：

- ・ いいえ、両親とも私の幸せを第一と考えてくれているので後々の進路のことは自分で決めさせてくれます。

娘の幸福を第一に考えるか否かは、「伝統的女性の役割」を両親が認めているかどうかの試金石にはなりえない。さらに「自分で進路を決めさせてくれる」というのも、問い1の答えとしては不十分である。性の役割分担は意識化されぬままに、しかも暗黙の了解のもとに行われることが多いのである。上記の答えは、これらの問題が意識されていないことを示している。豪人学生にはこの種の答えは、全くなかった。

次に興味深い対照的ともいえるべき母親像が現れる。

- ・はい、たとえば母親は私や妹には炊事、洗濯などを手伝うように言うが、弟には決してそのようなことは言わない。
- ・私が専業主婦になりたいと思っているのに、母はこれからはそれではやっていけないとか、職を持たなければいけないとよく言う。

前者は、性の役割分担を認める母親であり、後者は新しい母親像と言ってもよいだろう。この新しい母親の考え方の根拠について、母親が仕事を持っていることを学生はあげている。今回の調査では、この新しい母親の出現が目についた。

[問い2について]

豪人学生のほとんどが、教育現場での男女平等を述べている。ここではその中の典型的意見を一つあげるにとどめる。

- ・ There has always been a strong anti-sexist current in all the schools that I have attended.

日本人学生の24%が、この問いに対する答えを保留したことはすでに述べた。これらの意見を詳しくみてみよう。

- ・女性の先生は男女平等の考え方だったが、男性の先生は伝統的な考え方の人が多かったような気がする。
- ・学校ではどちらがいいと教えられた事はありませんが、家庭科や保健の先生はわりと家庭をすすめるようで、英語の先生あたりだと男女平等の仕事に賛成する人もいました。
- ・先生から男の人をたてなさいと教わった覚えは全くありません。むしろ反対だったと思います。しかし高二、三年の若い男の先生は別でした。進路を決める時は、「女がそんなところへ行ってもなあ……」と口にすることがありました。

上記の意見から、日本の教育現場での男女平等は教員個人に依存していることがわかる。しかも教員の性別および担当科目によって一定の傾向があることに、学生は気づいている。

[問い3について]

この問いに対する答えは、豪日で対照的であることはすでに述べた。豪人学生の中で顕著なものをあげてみよう。

- ・ No. Our society has come a long way from women serving for men so now I feel that if I have the qualifications I can get any job.
- ・ No, but I feel this is because of my tertiary education. I think if I had to get a job with year 10 standard I would face more difficulty because I am a woman.

- ・ No, because of the equal opportunities act.

上記三例はいずれも高校生の意見である。彼女達はすでに男女平等の歴史を知り、機会均等法についても言及している。さらに男女平等と機会均等のためには、教育が重要であることにも気づいている。

これに比べて、日本人学生の80%が就職および職場での機会均等と男女平等は、依然として達成されていないと考えている。

- ・ 当然（差別は）あると思う。男女雇用機会均等法がつくられたからといって簡単にかわるものではない。
- ・ 仕事というより生きているうち、人生全般においては女は不利だ！と思う。私は男に生まれたかった。

これらは日本の社会の現状が、男女平等にはいまだなっていないことを示しているのだが、そのような現状に対しても、さらに次のような二つの考え方がある。第一は：

- ・ （差別は）あると思う。それは全く自然なことである。
- ・ 私はよほど自分も好きでなおかつやりがいのある仕事だったらやってみたい気はするけれど、結婚したら家に入るつもりでいるし、自分の収入こそないけど女性の役割と思って真剣に家事をするなら後悔はないと思います。

これらは差別肯定派である。このような意見は豪人学生では、全くみられなかったものであり、日本での男女平等の前途の困難さを暗示している。なぜなら女性自らの意識の低さが、依然として男女平等の普及の壁になってしまっているからである。

第二は：

- ・ 確かに苦しい状況に直面するでしょうが、男女雇用(機会)均等法などもあり、開けてくるのではないのでしょうか。昔よりはどんどんよくなってきているのだらうと思う。
- ・ 多少そうなの(差別がある)かもしれないが、あまり私は難しいとは考えていない。男女雇用(機会)均等法もこれからますますきちんとされていくと信じている。

これらは差別解消派とでも分類すべき意見である。

第一の差別肯定派と第二の差別解消派は、一見対照的であるが、共通する問題を抱えているとも言える。すなわちどちらの学生も自らが実際の男女平等と機会均等実現のためにどのように行動するか考えるには至っていないということである。これらの意見が四年制大学の学生であることを考えてみると、差別解消派の意見などもオーストラリアの高校生に比べて一般論と希望的観測に終始しているように思われる。



## 考 察

私たちの調査結果から、日本人学生よりも豪人学生の方が、男女平等を認識し、女性問題に関する情報を自分自身に関わるものとして扱っていることが明らかになった。しかし、だからと言って、オーストラリア社会では早くから女性の地位が高く、機会均等が実現されていたということではない。オーストラリアはほんのしばらく前までは『男性主体の国家』であって、女性の総合的地位は西洋の中で最低に近いものであった<sup>6)</sup>。また、いまだに教育水準の低さから、女性の職業はタイピスト、教師、看護婦、店員、事務員等に限定され、女性が専門職に就くことは困難な傾向にある<sup>7)</sup>。

オーストラリア政府は、1975年の国際婦人年より女性の地位を向上させたり権利を守る政策を強く進め、1977年には Equal Opportunities Act が制定されている。AGENDA 実施に向けての演説（1985年11月）の中でホーク首相は、その取り組みを「世界に比類なきもの」とし、さらに “We want to give women the opportunity to contribute to the full to future development of our nation, whether in a domestic setting, in the workforce, or in any other aspect of life.”<sup>8)</sup>と述べている。

オーストラリアは原住民と移民、及びその子孫とで構成されている国である。国の成長発展のためには、社会の周辺にいる人々、抑圧されている人々を社会に参加させることが必要である。これまで抑圧されてきた女性の地位を向上させることは社会の要請の一つであり、その実現において教育は重要な役割を果たすと考えられていることは、AGENDA が教育問題から論じ始められていることにも示されている。人々の教育に寄せる期待は大きく、教育はオーストラリア女性の関心事の第1位を占めている。Setting the AGENDA は次の様な意見を紹介している。

“...One of the main aims of Agenda for Women should be to ensure a quality education for girls. ...whether they will choose to follow a full time career, to combine career and marriage or to remain full time homemakers, a sound education will improve the quality of their life style. It is undoubtedly at the education level that equality of opportunity begins.”<sup>9)</sup>

私達の調査でも、豪人学生達は教育の重要性に気づき、また、これを自ら推進していこうとする姿勢を示す回答を寄せている。一方、日本人学生の中には、問題を正確に把握することができなかつたり、女性問題を自分は別にして一般論でしか考えることができない学生が少なからずいる。これは、オーストラリアと日本の教育現場での婦人問題に対する認識とその取り組み方の差を示しているのではなかろうか。

オーストラリアにおける男女平等は官民双方の様々な努力によって着々と実現されつつあり、期待をもって迎えられている。先進国の中では女性の地位が著しく低いと批判される日本でも、オーストラリアに倣い、まず教育の在り方が問われるべきであろう。S. N. サンプソンが ‘The role of the school in sex role stereotyping’ で述べている次の結論で、私達の考察を終えることにしたい。「学校内に男文化・女文化という二つの文化を永久持続させるかどうかの責任は、教育制度全般にあるというより人間にある（強調筆者）。この論文の中で述べたような状況は社会的な性別役割分担が無意識のうちに固定化された結果生じたのであり、その解決は、人々—教師、父母、少年少女達—の認識によってのみ可能である。」<sup>10)</sup>

## 注

- 1) 今回の意識調査には、学生用と成人用の二種の英文質問紙を用意したが、そのうちの学生用質問紙に寄せられた回答のうち、本報告では前半部（項目B〔1〕1. 2. 3）のみを取り上げている。
- 2) オーストラリアには、1987年現在、総合大学21、教育・工科大学44があるが、女子大学は0である。高校については、比率は不明ながら公私立の男女共学校、女子校、男子校がそれぞれ存在するが、我々の Questionnaire に回答を寄せたのは共学校生徒のみである。他方、今回対象群とした愛知淑徳大学は女子単科大学であるが、新入生の72%は、男女共学高校出身者である。なお、豪人学生の大学生対高校生の比率は1：1である。
- 3) オーストラリアでの調査は依然継続中であって、今後更にクィーンズランド州・サウスオーストラリア州よりの回答も集計の中に加えられる予定である。これにより回答者の人数は増加し背景も多様化する筈である。
- 4) 図1には、私達の調査報告全般に関わる資料として、回答した全ての女性のデータ（質問紙の項目A）がまとめて示されている。
- 5) 図2には、学生用質問紙のB〔1〕1. 2. 3の回答集計結果のみが収められている。
- 6) Dixon, M.: *The Real Matilda*, pp. 21~26, Pelican Books (1984), 邦訳『オーストラリアの女性哀史』（勁草書房, 1986）
- 7) 国際婦人教育振興会：『昭和58年度調査研究報告書』pp. 39~40 (1983)
- 8) Department of the Prime Minister and Cabinet Office of the Status of Women: *Setting the AGENDA*, pp. 92~93, Australian Government Publishing Service. Canberra (1987)
- 9) *Ibid*, P.8.
- 10) Grieve, N., P. Grimshaw: *Australian Women -Feminist Perspectives-*, P. 246, Oxford University Press (1981), 邦訳『フェミニズムとオーストラリア』（勁草書房, 1986）

### その他の参考文献

- White, M.: *Women of Whyalla. Australia*, Librairie Unite (1987)
- Social Education Bureau: *WOMEN and EDUATION in JAPAN*, Ministry of Education, Science and Culture, Japan (1986)
- 名古屋市：名古屋市の女性の意識と生活実態，名古屋市民局（1986）
- G・シェリントン，加茂恵津子：オーストラリアの移民（勁草書房）（1985）
- オーストラリア広報局：オーストラリアハンドブック，1985（1985）
- M・クラーク，竹下美保子訳：オーストラリアの歴史，サイマル出版会（1978）